
王族という偉大なる変態に挑むいたいけなメイドの人生について

佐藤みりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王族という偉大なる変態に挑むたいけなメイドの人生について

【Nコード】

N5251Y

【作者名】

佐藤みりん

【あらすじ】

大陸最南端に位置する国、フィリカ王国。神の血をひくと伝えられる王族がいるその国では、戴冠式が行われてた。

新しく王位を戴くこととなったのは、エリザベス・フィリカ。民衆の望む要素を備えた美しい女王の即位は諸手をあげて歓迎されていた。

そんな、国が喜びに満ち溢れた祝いの日。女王に仕えていた優秀なメイド、ティア・メディチは一つの決心をした。

この、どうしようもない王族の君臨する王国を滅ぼそう。それが無理なら……国際結婚をして、この国から脱出しよう！

そうした決意のもと、ティアは職を辞して婚活を始めようとするが……！？

『できる女は結婚できない』。これは、そんな言葉を体現している、恋に疎い女の子の婚活ファンタジー！……に、なる予定です。

第一話 革命という悲壮な運命の火種について

それは、歴史の転換点というべき出来事だった。

王宮前の広場には、多くの人が密集していた。

人、人、人の身動きもロクに取れないほどの密集率。決して狭くないはずの広場が隙間もなくふさがり、押しあいへし合うそれらの熱気がまたすごい。みな興奮してざわめいている。そのごたまぜになった感情は、期待、喜び、そういった、めでたいものを前にした明るいものだ。

それを一望できる王宮のバルコニーに、着飾った女性が立っていた。

まだ、二十には届かないだろうか。まばゆいばかりの、金髪。抜けるような白い肌。穏やかで優しい面立ちから、その清らかな内面を察するに余りある。天使か聖女が降臨したといったら信じてしまいそうな美しい女性である。

彼女こそが、このお祭り騒ぎの現況にして主役だ。

「みなさん、こんにちは。本日から我らがフィリカ王国において、女王の称号を戴くことになりました、エリザベス・フィリカですわ」

静かな口調ながら、魔法によって拡大されてた声は集まった民衆の耳に確かに届く。クイーンエリザベス万歳！ 演説を始めた彼女向かって、そんな声がそこかしこから上がった。

エリザベスは、それにつっこり笑って答えた。

「国民のみなさん。みなさんがご存じの通り、わたくしが手に入れたこの王位は、血族を蹴落として手に入れたものです」

母親を排除し、父親を押しつけ、弟を抑圧し、親類を寄せ付けず、途中まで協力していた第一継承権をもつ兄をも蹴落としてその地位を手に入れた彼女だが、その悪辣とも言える行いに反して、熱狂的に国民から支持され、祝福されていた。

なにせ、彼女のような王族の登場は、この王国の全国民の悲願だったのだ。

「そんな強引な手法で王位についたことを、快く思わない方もいるかと思いますが。人格に問題のある暴君にならないかと、不安がられたかも知れません。墮落した愚王にならないかと心配されたかも知れません」

フィリカ王国の民衆が求め焦がれる主君。それは、何も賢王でなくともよい。英雄でなくともよい。もちろんそれに越したことはないのだが、それ以上にフィリカ国民が王に求める要素はただ一つだけである。

普通の王様であれば、それでよいのだ。

なぜ国民が普通ならば求めることのない望みを抱くのか。そんなある種当たり前のことに焦がれるのか。その理由は、この王族の呪われた血筋に起因する。

そう。この国の王族は……先祖代々、ゆるぎない変態集団として有名なのである。

「思い返してみればわたくし達王族は、圧政を敷くに等しい苦痛をみなさまに与えてきたのかもしれない。時として行われる王族による奇行の数々。また、王権を盾に施行される訳のわからない理不尽な勅命……。でも安心してくださいませ。そんな愚行が行われる

ことは、もうありません。わたくしは、みなさんに精神的な苦痛を与えることは致しません。そう。わたくしは、いままでの王族と違って、異常な性癖を持ち合わせてなどいないのです！」

例えば、エリザベスの祖父に当たる前々代の国王は『裸の王様』の異名を持っていた。

戦乱の世で王位にあった彼は、質実剛健を旨としていた。儉約を好んだ彼は、税金から王族に与えられる費用を徹底的に削り、自らの生活を切り詰めた。

特に彼が嫌ったのは何枚も重ねて着るような装飾過多な華美な盛装だった。衣装棚にあった服をすべて処分。そして戦時ということもあり、資金不足から国王の着る服はどんぼろぼろになっていた。

その自らを犠牲にする王の行いに国民は感銘を受けたが、地獄はそこから始まった。

彼はそうやって繕いだらけになった服の着用を「みつともない」と言って拒み始めたのだ。いろいろと理由をつけては服を脱ぐ。とりあえず服を脱ぐ。国庫から衣装代をひねり出しますからどうか服を脱がないでくださいと申し出ても、国民の支持を得た「儉約」を盾に一蹴される。そうしてとにかく服を脱ごうとする。国民が「何かおかしいぞ？」と首を傾げた時にはもう手遅れ。あげくの果ては「衣服など不要！ 王様は、裸であるべきだ！」と全くもって意味不明な宣言をし、人間を知的生物足らしめている三大要素である衣食住の一つを完全否定。それ以降の普段の格好は上半身裸でワキ毛力を見せつけるのが当たり前、ひどい時にはパンツ一丁で王宮内を歩き回るといふ常識さでメイドたちを昏倒させ、それどころか市内の見回りと称して裸で馬に乗り、見るに堪えないその姿で市民を阿鼻叫喚のるつぼにしたこともあるらしい。

「わたくしの親類縁者は、みな何かしらの変質的な嗜好を持ち合わ

せてます。残念ながらそれを野放しにしているは、国民の皆様のお安眠を確保することは出来ないでしょう。いつ王族が奇行に走るか、意味のわからない法令を施行するか、そんな不安におびえることになってしまおうでしょう」

またエリザベスの父である前王レラニーは無類の生足好きであった。嫁選びの際にはガラスの靴を職人に作らせ「この靴にぴったり合う足の持つ主がわたしの理想の女性だ！」と宣言し、国民の女性一人一人にはかせて回ったという逸話はあまりに有名である。

レラニー王はその勅命により国民の時間と税金を無駄に消費し「もしこの靴にぴったりだったら、変態の嫁にされる……！」という恐怖で女性の精神を圧迫した。その愚策でひとりの貴族の女性が選ばれるまで、レラニー王は「死んでくれ、レラニー王」略して「死んでレラ」と、愛称でもって切実に死を願われ続けた。

「ですから、わたくしは心を鬼にして、わたくしと同じく変質者ではないと噂されていた双子の兄と共に、血縁者の排除を始めました。親類から始め、最終的には父である前王を始め、ほとんどの王族を政治の場から隔離することに成功しました。これで、わたくしの母のような不幸な人間を出さずにすみませう」

ちなみにレラニー王と結婚したその貴族、つまりエリザベスの母に当たる女性は、五年ほど昔に王宮を飛び出て実家の領地に引きこもっている。市井の間では「国王の性癖に耐えきれなかったんだ」と、もつぱらの噂だ。

そんな王族との縁子を持つことを、みな嫌がる。

「しかし、その直後、わたくしはあることに気がついてしまったのです」

だって、変態なのである。

相手が常軌を逸した変態とわかっていいるのだ。そんなところに娘や息子をやりたくないのが親心だし、本人だって変態の相手などしたくはない。いや、それだけならまだ利益に目をつぶれる人間いるいるのだが、もうひとつ大きな問題がある。

生まれる子供も、必ず変態になると決まっているのだ。

この悪条件を前にして、国内の貴族は本来ならば喜ばしいはずの王族との婚姻に嫌悪感を覚える。王族と血縁を持った瞬間、社交界の場では「ほら、変態の……」「おお、あれが有名な変質者血筋のお仲間か」などと陰口をたたかれる屈辱に耐えなければならぬ。王族との縁を持つメリットより、大いなる精神的苦痛が課されるそのデメリットの方が大きいのだ。

「兄も、わたくしと同じく変態ではないと期待されていました。実際、わたくしもそうだと思ってきました。だから、彼と共に他の王族との戦いに身を投じたのです。しかし、わたくしは気がついてしまいました。兄もまた　特殊な性癖を持つ人間なのだ」と

エリザベスは悲しげにそつとまぶたを伏せる。無念でたまらないと、ひしひしと伝わるその仕草は国民の心をつかんで揺さぶった。

「変態の血筋は、絶やさなければなりません。王族というのは、常に清く、公明正大でなくてはならないのです。ですから、わたくしは断腸の思いで、協力していた兄をも排除いたしました。繰り返しになりますが、公言いたします。わたくしは、正常です。おそらく、わたくしの子も正常でしょう。いえ、正常に育て上げてみせます！」

いままでの王族は、漏れなく変態だった。

だが、この女王は違う。

平民から貴族まで、王族以外の全員が望んでいた、王族史上初め

ての変態ではない人間なのだ。

「わたしはこの国の王族を、他国に誇れる王族にしてみせます！
いままでの黒歴史など消し去る王族が、この国の輝かしい未来が、
いま始まるのです！」

クイーンエリザベスが高らかに宣言すると同時に、地面を打ち鳴らすほどの歓喜の歓声が鳴り響いた。

女王の自室。

そこでは一人のメイドが主の帰りを部屋で待っていた。

彼女の名前は、ティア・メデイチ。この広い王宮で数いるメイドの中、唯一、女王専属を許された優秀な人物である。

冷静沈着で知られる彼女は、いまも落ちついて主人の帰りを待っているように見える。だがよく観察すれば、時折、足のつま先が上がり床を叩いているのがわかる。国民の歓声が響いた時には、わずかに顔を曇らせたりもしていた。些細なことではあるが、普段のティアは「鉄面皮」とも揶揄されるほど無表情かつ正確に、淡々と仕事をこなしている。そんな彼女にしては、わかりやすいぐらいに感情が表出していた。

そして奇妙なことに、ティアは手のひらにトカゲを乗せていた。

当たり前だが、女王の部屋にトカゲなど持ち込んでいいはずはない。もちろんエリザベスがトカゲを飼うような変わった趣味の持ち主だったりもしない。

ばかりとトカゲが口を開いた。

「ティア……」

「もう少しお待ちください、エリオット様」

何か言おうとしたトカゲを、ティアはぴくりとも表情を動かさずに制する。

しゃべったことからわかるように、このトカゲ、ただのトカゲではない。ティアの鉄面皮が崩れかかっている一因として、このトカゲがエリザベスの兄である元王子という紛れもない事実があるのだ。そう。この度の王族の排除のほとんどを取り仕切った王位継承権第一位の持ち主、エリオット・フィリカである。

容赦ないことに、妹による魔法でトカゲにされたのだ。

メイドもトカゲも、それ以上は一言も口を利かずに待機していた。元凶たる本人がいなければ、何の進展もないと両者わかっているのだ。

そう待たずに、扉が開いた。この国の新たなる女王、エリザベスだ。ここまで付き従っていた侍従はエリザベスのねぎらいの言葉を受け、扉を閉めて下がって行く。

侍従がいなくなったのを確認して、くるりとエリザベスがティアとトカゲへ振り返る。

「ただいま帰りましたわ、お兄様、ティア」

エリザベスが浮かべたのは、悪びれもない幼い笑顔だった。

王家唯一の真人間と謳われるこの王女　いや、もう女王か。その言動は、クイーンエリザベスと祝福される若き為政者の振る舞いにしては、少々幼い。

「おかえりなさいませ。式典、お疲れだったでしょうか」

「うっん。大したことじゃありませんわ」

まず先に動いたのは、ティアほうだった。何よりもまず帰ってきた主に頭を下げ、手の平に乗せていたトカゲをテーブルに移す。式典用から普段着のドレスへと女王の着替えを手伝いながらも沈痛な表情で申し出た。

「エリザベス様。どうか思い直していただけませんか」

彼女はメイドではあるが、この国有数の権力者であり高潔な人格者として知られるメディチ侯爵の令嬢でもあり、才媛としても広く知られている。社会勉強の、そして一種の諜報活動の一環として王宮に奉公しているのだ。この国の行く末を、少なくとも現王位にある女王よりは案じている。

そしてティアは、エリザベスの王女時代から使えているため彼女のことをよく知っていた。

「エリオット様を人間に戻し、国民の誤解を解いてくださいませ。まだ間に合います。いまは熱狂的に支持されておりますが、エリザベス様の、その……王家特有のご病気がばれましたら、国民は一気に手のひらをかえしましょう。期待が高かった分、そのしっぺ返しは強烈です。そうなる前に、エリオット様に王位を受け渡すべきなのです」

そう。残念なことに、エリザベスもゆるぎない変態の王家の例にもれず、変態なのだ。

エリザベスは、人をいじめて喜びを覚える。そんな性癖を持っているとSの変態で、あくまでその対象が血縁者限定に限られているから国民にその性癖が露呈していないだけなのだ。

「あら、ティアはそんなにそのトカゲ君を応援したいんですの？」
「はい」

自分の兄であるトカゲを指差すエリザベスに、ティアは無表情ながらもはつきり頷く。トカゲにされたとはいえ何の問題もなく喋れるのだが、エリオットは交渉の邪魔はするまいと黙ったままだった。
だが

「そう。けれど、いくらティアの頼み事でも、い・や・で・す・わ」

案の定、エリザベスはあっさり笑って断る。

「エリー。お前な……」

そのやり取りを耐えられなくなったトカゲの王子、エリオットも苦々しく呟く。

「自分が何をやってるのかわかってるのか？」

そもそもエリオット達の母親が実家に逃げ帰ったのも、実はこの妹のせいなのだ。母親は普通の貴族の生まれながら「この美しい足は誰かを踏むべきものだ。できるならば平民よりも、貴族を。欲を言えば自分より身分の高い高貴な方々を踏みたい」と、常人にはとつてい理解できないことを常々思っていたらしく、生足好きでそれに踏まれると喜びを覚えるという変態の国王とはこれ以上ないほどお似合い夫婦だった。

そう。二人の性癖は、がちり噛み合っていたのだ。ということ
は、エリオット達の母は、別にレラニー前王の変態嗜好についていけなかったわけではない。彼女が実家の領地に逃げ帰ったのは、国民で噂をされているようなことが原因ではないのだ。

「全然わかりませんわ。お父様が変態丸出しの勅命によってお母様を見つげ出したように、またお母様が嬉々としてお父様のことを踏んづけていたように、おじい様が好んで衣服を身に着けていないように、わたくしはわたくしをしたいようにしただけですもの」

「……はつきり言おうか、エリー」

彼らの母が実家に帰った原因は、エリザベスである。変態の二人の間から生まれたやはり変態のエリザベスは、物心ついてから母親のことをねちねちくじくくちくちくいやがらせやらを続けた。それはもう楽しそうに、時には恍惚とした表情で、人目につかないよう、陰険極まるイジメを続けること十三年。

その結果、母親は実の子による精神的虐待に耐えきれなくなつて実家に逃げることになった。

「あんな、エリー。お前、王位つてもんは趣味で奪つていいもんじやねえんだよ……！」

そして今回エリザベスが王位を篡奪したのも、その趣味によるものなのだ。

この変態王族を一網打尽にする計画はもともとエリオットが画策し、ティアの協力を仰ぎながら取り仕切っていたものだ。双子の妹である王女と共に国民から「変態ではない」と期待されていた彼は、その期待にこたえようと行動したのである。

そして、その最後で妹に裏切られた。

ティアがトカゲになったエリオットを発見し、エリザベスに理由を問い詰めると、いわく「王位を取られて悔しがる親類および父親、そしてお兄様の姿は見ていて楽しいのですわ。お兄様の味方をしていたのは、その一環なの」とのことだ。使命感に駆られて行動した王子とは、行動原理があまりに違う。

「エリザベス様。わたしからもお願い申し上げます。国民の為に動いていたエリオット様の功績を奪い、その理由づけの為にエリオット様まで変態に貶めるなど、あまりに無体。なにより政治は、趣味で、お遊びで弄んで良いものではありません。わたくしたち貴族、王族は常に公務の無私であり、国益を、国民を優先して動くべきなのです」

真摯にうつたえるが、エリザベスの笑顔は崩れない。

「あら、でも変わらないと思うの。誰が王位に就こうと、うちの一族はみいーんな変態。残念ながら、国民の期待にこたえることは出来ませんわ」

「ですから、エリオット様は違うのです。この方は正真正銘、王族史上初の
「
「いいえ」

やわらかい笑顔のまま、首を横にふってティアの言葉を遮る。

「わたくし、知っていますの。隠してはいるものの、お兄様も変態。我が王家の、ゆるぎない変態の一員。ねえ、この シスコンお兄様」

「え？」

ティアは、無意識のうちに一步後ずさった。ティアは、この王子に限っては変態ではないと信じていたのだ。だからティアは国の為、エリオットに知恵を貸し、陰ながら支えてきた。

なのに、まさか……？

「お、王子……？」

「おいおい、ティア。勘違いするなよ？ エリーもなに言ってるんだ。誤解されるじゃないか」

妹たる女王の言葉に、トカゲとなったエリオットは慌てない。どころか、トカゲの分際で器用に鼻で笑って見せた。

そんな王子の様子にティアは安堵の息を漏らす。どうやら、エリザベスの勘違いの

「まったく、何てことを言ってくれるんだよ。確かに俺はお前のことを愛してる。ああ、母上より父上より深く広くお前を愛してるさ。こんなトカゲにされたいまでも愛してる。だがな、それはあくまで家族に向ける感情の域を出していない。例えば、腹心の部下にエリーの行動を見張らせて逐一報告させていたのは、妹のことを知りたいという兄心の一環だ。エリーが昔に使っていた布団やシーツ、服や下着を回収させていたのは、妹の過去の思い出が欲しかったからだ。基本的に妹にしか反応しないが、それは妹とひとつになりたいたいという、そんな純粋な思いだ。俺は、お前らと違って正常なんだ！」

「申し訳ありません、エリザベス女王様。わたし、本日をもって王宮からお暇をいただきたく存じ上げます」

いつの間にそこまで下がったのか。熱弁をふるうトカゲの王子から一刻も早く離れたかつたらしく、ティアは扉を開いて半ば部屋を出ていた。

「しまったやっべえ口が滑ったあああああああ！」

エリオットが叫ぶが、それを見るティアの顔にさきほどまでの同情はない。いつそ冷徹で、勝手にやっつてこの変態王族共、と顔にはつきりと書いてあった。

「あら、辞めちゃうんですの。さびしくなりますわ……。でも、無理に引き留めるものではありませんわね。今日まで御苦労さま、ティア。あなたは良く仕えてくれましたわ。召使えてくれた人間に友愛の情まで持てたのは、あなただけ。その旨、きちんとメディチ侯爵に伝えておきますわね」

「過分なお言葉、もったいのうございます」

「ちよちよ、ちよつと待つんだティア。俺は変態じゃないんだ！ さっきのは軽いジョークなんだよ！ だからマジで見捨てないでくれ！ 参謀代わりのお前がいないと、ここからの挽回は」

「エリザベス女王様への愛を語る時、うっとりしておりました。この上なく嬉しそうに総合を崩しておいででした。超キモかったでございます」

「しし、してねーよ！ 家族への愛を語ってただけで、そんな顔になるわけねーだろ。てか、爬虫類の表情がわかるのかおまえは！？ 表情筋ないんだぞ！？」

「いいわけはよろしいです。もうあなたに協力する理由は一切ございません、へんたごほんごほんエリオット元王子」

「おい、いまナニ言おうとしたメイド！？」

「わたしはもうメイドではございません。誇りあるメディチ侯爵家の三女、ティア・メディチです」

エリオットが無表情でせきこんだティアを言及するが、元王子への敬意が微塵に砕けた今、彼女の目にある侮蔑の光は揺らがない。

「もう王家に希望はないとはつきり判断しました。いえ、そもそも少しでも期待していたわたしが愚かだったのです、しすこげふんげふんエリオット元王子。革命でも起こって、王家の高貴なる血筋が絶えることを切に願います」

「おま……。っ。んなことになったら、この国たぶん滅ぶぞ！？ い

「まの体制がどれだけ王族に負担掛けているのかわかっているのか!？」

エリオットの反論は、何も大げさではない。この国は、王族の力によっているところが大きいのだ。

この呪わしき変態一族を王族たらしめているゆえんは、その高い戦闘能力にある。ある特殊な血筋である彼らは、男児ならばかならず一騎当千の猛者となり、女児ならば変幻自在の魔女となる。戦の時には王族自ら前線に出張り敵を蹴散らすその姿は、「王族が変態でも別にいいんじゃないか! 彼らは勇猛果敢に国を守ってくれている!」と国民や貴族に畏敬の念を抱かせるほど圧巻である。

しかし、ティアの白けた視線は動じない。

「知ったことではありません。いえ、むしろ、未来の為、人民の為、人類の為、こんな王族が治める国など滅んだほうがよろしいのではございませんか? ねえ、変態シスコン元王子」

エリオットは、ティアのあまりにはつきりした物言いに絶句する。フィリカ王国内の王族すべてに向けた不敬も甚だしいのだが、兄がいじめられている様子が楽しいのか、エリザベスはここに観覧していた。

だが実際、これがいまの国民の気持ちである。一昔前の乱世ならばいざしらず、最近は国内外を問わず落ちついて平和なのだ。いま王族に対する敬意は、新たな女王へのものを除けば地に落ちていると言っている。もしクイーンエリザベスの変態性が表ざたになったら、すぐにでも反乱が起きるほどの不満が国民には積み重なっている。

「わたしはもうメイドなどやめて、ただの貴族の娘にもどり他のまともな方と結婚でもして幸せになります。さようなら。いままでお世話になりました、変態トカゲ様。もう二度と会うことはないでし

よう」

「ティア……二度と会えないなんてさびしいこと言わないでくださいな。わたくしたちは、友達でしょう」

「エリザベス様……身に余る光栄です。それと、勘違いをさせてしまったようで、申し訳ありません。このティア・メデイチ、爬虫類なトカゲと尊敬すべき女王を同列に並べたりは致しません。エリザベス様とともにあったこの三年間は、忘れがたい貴重な日々でした。女王のお傍にあったこの勤め、これからも決して無駄には致しません。お目にかかれる機会があることを、切に祈っております」

「おいちよつと待てティア！　なんか俺とエリーとの扱いの差がひどくないか！？　俺も一応王族だぞ！？　それにエリーも変態だろ！　なあ！　何が違うんだよ！」

「人語を発する摩訶不思議なトカゲが何か騒いでおりますが、お気になさらなでください。これからはお忙しい御体です。御身を大切になさってください。爬虫類が発する雑音など、女王陛下のお耳に入れる必要はありません」

「そんなことは、もちろん承知していますわ。ティアには一点の非もありません。……あ、でも、結婚するときは知らせてくださいな。かけがえのない友人の婚姻ですもの。全力でお祝いしますわ」

「お言葉、つくづくもったいのうございます。それでは」

「だから待ってくださいティアッ、ティア！　待っ　ちつくしよおう俺の野望がああああああ！」

ばたん、と。

わざとらしく音を立てて、ティアは扉を閉めた。

「さあってお兄様。ティアもいなくなつたことですし、気兼ねなく遊びましょう。あつちに、お父様もおじ様もおば様も、みーんな小動物に変えて閉じ込めてありますの。うふふ。遊びがいがありそうですね」

「ちよ、エリー、やめろ、やめるんだ！　いくら妹でもやっていいことと悪いことが」

「うふふ、そんなこと言つて内心では喜んでるくせに。妹にいじめられるのがそんなに嬉しいんですの？　さすがはシスコンマスターですわね。顔がだらしなく崩れていますわよ、お兄様のへん・た・い」

「おかしいだろう！　なんでお前らは爬虫類の表情を読めるんだよ！？」

「うふ。それにわたくし知ってますのよ。お兄様が王位を欲した理由。妹とでも結婚できる、っていう内容の法律を作りたかつたんでしよう？　全くもう、お兄様つたら。血族に恥じない、ゆるぎない HENTAI ですよ」

「な、なぜそれを……ティアにもばれないようにひた隠しにしてたのに！？」

「……………いま、自分の使命がわかりました」

かすかに漏れ聞こえるそんな会話を聞きながら、ティアはひとつの決心をした。まともなる王家の人間を擁立して、誇りある秩序をこの国にもたらそうとしたのだが、あまりに浅薄だつたらしい。ティアは、自分の考えの甘さに恥入り、己の心を戒めた。

もう容赦はしない。

かつかつと足音を響かせながら、ぐつと握りこぶしを作つて決意

を固める。

「一刻も早く、この国を滅ぼさなければ」

最低でも、あのトカゲは自分の耳目の届く範囲から駆除しよう。そう決めたティアの足取りに、迷いはなかった。

その人生においてただの一度も敗北することのない女王エリザベスと、敗北と妥協を重ねながらも確実に自分の目的を達する元女王付きのメイドだった令嬢ティア。

この二人が相對するようになるのは、まだまだ先の話である。

第一話 革命という悲壮な運命の火種について（後書き）

見切り発車で始めました。なんちゃって異世界ファンタジーです。適当に決めたゆるゆるな世界観でやっていけるのでしょうか。いまから不安でいっぱいです！

それと、一つだけ言い訳を。本来この世界に存在していないはずの単語（シスコンとかどSとかシスコンとか）を多用してますが、お目こぼしくください。やっぱり「妹好き」より「シスコン」、「加虐趣味」より「どS」にしたほうが、伝わるものが全然違うと思うんですよ！

何かご指摘ご感想ございましたら、お気軽に書いてください。泣いて喜びます。

第二話 大陸という複雑怪奇に入り組んだ情勢について

ティアが王宮の奉公に来た、初めての日。

王女の自室に向かうために王宮の廊下を歩いている彼女は、緊張をしていた。

身を包んでいるメイド服は、初めて袖を通したわけではないが、やはりまだ着慣れてはいない。わずかにうつむいている顔は無表情に見えるが、ティアの平時に比べればやや青ざめこわばっている。

祖父に言われ、王女に仕えるために初めて入った王宮はきらびやかだった。目にはいる人すべてが自分より洗練されており、華やかであるように思えた。こんなところで自分はやっていけるのだろうか。侯爵である祖父の顔に泥を塗ってしまわないだろうか。可能な限り王宮内の情報を集めて伝える言われているが、自分にそんなことができるのか。様々な不安が胸に渦巻く。そして何より。

自分は、場違いではないのか。

どうしても、その思いが拭い去れなかった。もちろん、ティアも礼儀作法は学んでいる。女の身であるため大学にこそ通っていないが、家庭教師から相応の教育も受けている。

けれども、自分は違うのだ。

生まれも育ちも性格も非の打ちどころがない成熟したレディである二人の姉とは、後継ぎとして立派に成長している弟とは、悪い意味で違うのだ。例えば侯爵令嬢という立場あったとしても、所詮自分は

「見ない顔だけど、新入り？」

突然声をかけられてびっくりと身をすくませる。向かいから人が来ていたことにすら気が付いていなかったのだ。

「何か御用でしょうか」

緊張からくる余裕のなさから、ティアは必要以上に固い声で答える。

警戒心をまとっているティアに、男はにこりと人好きする笑顔を浮かべた。

「いや、王女付きのメイドが今日来るって聞いてたから、君かなーって思ったんだが」

「そうですけれど」

「そっか。やっぱりな」

最低限の言葉だけで受け答えをするティアに、当たった当たった、などと嬉しそうに言いながら男は手を伸ばした。

なんだこの人。身構えるも、男の手はティアの警戒をあっさり突破。

むにり、と男はティアのほっぺをつまんで伸ばした。

えいや、とティアは反射的に男のノドぼとけに拳を叩き込んだ。

「じぶつ!?!」

鎖骨と首の境目に上手く入った。殴ったティア自身がほればれするよつなナイスキラーパンチ。しかも殴りつけるのと同時に、魔法で微量の電撃を流してある。

本来人が操れる魔法というものは、ささやかなものだ。フィリカ王族でもない限り脆弱な魔法しか使えないため、人を気絶させるどころか服を通してほどの電気は発生させられない。ティアだってその例に漏れない。

だからこそその、外気にさらされているノドへのパンチである。そ

して無警戒に電気を浴びれば人は身をすくめる。これも、上の姉から伝授された、メデイチ家護身術（レディ専用）の成果だ。姉さまありがとう。いまは嫁いで遠いところにいる姉に感謝しつつ、とどめを刺すため、ドコとはいわれないがナニを蹴り上げようとして

「あ」

さすがにまずいと我に返って行動を止めた。

仮にも王宮内部を歩いているような人間である。しかもここは王女の部屋がほど近いような奥の場所。いきなり女性に触れてくるようなジェントルマンの風上にも置けない変態紳士な人間であろうと、身分の高い人間である可能性が大だ。

「大丈夫ですか、へんた……ええつと、名も知らぬお方」

「げほつ、げつほ……ふう。いや大丈夫だけど、まさかいきなり殴られるとはな……って、おい。いまなんか失礼なこと言おうとしなかったか？」

帯電させた拳を人体の急所に叩き込んだというのに、平気そうにしている。というか、ティアにとっては都合なことに、そもそも電気を流されたことに気が付いていないようだ。

無駄に丈夫なのか、鈍いだけか。どちらにしてもやや失礼なことを思いつつも、ティアは素直に頭を下げる。

「申し訳ありません。上の姉から習った護身術に『もし不躰に触ってくるような変態男がいたら』という題目があったもので、ついで」

「全然申し訳なさそうに見えねえな……というか、そのお姉さんがどんな人なのかすごく気になっただけ。まあ、確かにこっちが悪かったか。ごめん。でも、ちょっとは緊張ほぐれただろ？」

「え」

男に指摘されて初めて気が付く。どうやら、ひどい顔だったらしい。事実いつもに比べて青ざめていた顔には、いまはうつすら赤みが差している。

ちよつと業腹だが緊張がほぐされたのは確かだ。

「どうも、ありがとうございます」

「どういたしまして」

ささやかな自尊心から、礼を言いつつもツンとして決して愛想のよくないティアに、しかし彼は気を悪くした様子もなかった。余裕のある態度だ。ティアは何気なく先ほどつねられたところをさすり、ふと気が付いた。

自分の表情はかなり読みにくいほうなのだが、なぜ極度に緊張していると分かったのだろうか。

尋ねようとしたが、その前に

「大丈夫大丈夫。王女様は優しいから、あんまり固くなりすぎないで接するのが一番だ。できるだけ自然体で、ぜひとも仲良くなってくれ。あんたなら、大丈夫な気がするよ」

「……王女とお知り合いで？」

「まあね」

聞いておくのも悪くないだろうと思って尋ねる。遠慮など今さらだ。

「王女は、どのような方ですか？」

「基本、優しくて淑やか、かな。評判はすごいいいな。人徳もあるし、人を見る目もある。猫かぶりがつまいともいえるかな。あ、そ

れと」

率直な意見である。参考にしようとしてありがたく頭の中で情報を整理していたティアは、男がにやり、といたずらめいた笑みを浮かべたのに気が付かなかった。

「ノックをされるのが嫌いだから、そのまま部屋に入っちゃったほうがいいぜ」

「ノックが……？ 気難しい方なのですか？」

「気難しいっていうか……まあ、悪い子じゃないから、そんなに心配すんな。あ、時間がやべえ。んじゃね」

「そうですか。いろいろありがとうございました」

そうやって二、三、半端な助言だけ残して、彼は去って行った。

それを見送ったティアは、ぼつりとつぶやく。

「……変な人」

お互い名も告げなかったそれが、ティアとエリオットとの最初の出会い。

彼が見えなくなってもなお、エリオットが去っていったの方向にティアの目が向けられていたのはなぜなのか。ちよつとだけ胸が温かく満たされたそれがいったいどんな感情の始まりだったのか。それを自覚するまでゆっくり考えられる余裕は与えられなかった。

なぜならば、この直後にエリオットの忠告を鵜呑みにしてノックもせずに王女の自室に入ったティアは『弟をイスにしてとても楽しそうに遊んでいる、真人間かも期待を受けているはずの麗しきエリザベス王女の変態的行為』という衝撃的かつショッキングなものを

目にすることになるからだ。

長く、数度鳴らされた汽笛の音で、まどろんでいたティアは目を覚ました。

「ん……」

少し、低い天井。横壁にはめられている窓から見える風景は、後ろへ後ろへと流れて行っている。車輪とレールの摩擦で揺れる列車の車両は、丁寧に造られてはいるが木製だ。

どこだここ。石材が基本の王宮にこんな場所があったか。一瞬だけ夢と現在がごっちゃになって戸惑う。

「あ。お目覚めになりましたか？」

ぱちぱちと目を瞬かせるティアに、迎えの席に座っていた少女が声をかけた。ティアと同年代の、栗色の髪を持つかわいらしい少女だ。

彼女の声に、すこし混線していたティアの意識がすつと現代に戻った。

「うん。わたしはどのくらい寝てた？」

「ええっと、ほんの五分ぐらいです」

「そっか」

なにか懐かしい夢を見ていた気がするが、思い出せない。横に視

線をやると、ティアの視界は流れていく風景を窓越しに捉えた。

ティアがメイドを辞して二か月後。彼女は実家の館に戻るために鉄道で揺られているのだ。

実家に帰るまで間が空いたのは、身辺整理のためである。夜逃げをするわけでもあるまいし、身一つで戻るわけではないのだ。仮にも女王付きのメイドであったティアが王宮からさるのには様々な手続きが必要だったし、侯爵令嬢が手ぶらでひとり館に戻るような不用心をするわけにもいかない。帰る際にはわざわざ実家から迎えのメイドが送られてきた。

とはいえ

(屋敷に帰るのぐらい、一人でできるのにな……)

それがティアの本音である。

王都とティアの実家である屋敷がある港湾都市は、フィリカ王国の要所の一つである。鉄道導入の際には真っ先に王都とつながれているため、馬車で何日も揺られることなく、半日もかけずに到着できる。ついでに貴族の令嬢らしくなく精神的に自立しきっているティアは、街中を一人で歩くことぐらい何とも思わない。

ティアの乗っている二等車両の対面に座る彼女は、ティアが帰るのに合わせて送られてきた。見覚えのない少女だったが、三年ほど実家にいなかったのだ。顔の知らない使用人の二人や三人増えていてもおかしくはない。

エレンと名乗った彼女は、先ほどから黙り込んでいるティアのほうをちらちらとうかがっていた。ほとんど会話もしていないこの空間が気まずいのだろう。そもそもこのメイド、手際が非常に悪い。経験が浅いのだろうが、手回しができていなかった。馬車の手配も鉄道の切符の購入もティアがすべてやったのだ。実質、荷物持ちぐらいにしか役に立っていない。

そのティアは、付きそいであるエレンのことは完全に放置し、鉄

道列車の中でつらつらと考え事をしていた。

(領地に帰ったら、何しよう。革命を起こすにしても、すぐというわけにはいかないし。ていうか、だんだんやる気がなくなってきた……)

なかば私怨で革命を決意してみたティアだが、自分がすぐに革命を引き起こせるとは思っていなかった。というか、考えれば考えるほど不可能ごとの気がして、現段階ですでに革命という難事を放棄しかけている。

(だって、よくかんがえれば王族を倒す必要性も見当たらない)

軍神マルスト、大魔女モルフィナの子孫。それがこのフィリカ王国の王族だ。それはこの国の建国神話であり、れっきとした史実である。

はつきりと自らが神の子孫だと宣言している王族は、大陸中見渡しても稀だ。このフィリカ王国と、梟神ネルバの子孫である北の帝国ユージニアの王族ぐらいだろう。両国ともに大陸に名をとどろかせる強国だ。

だから、神の子孫たるこの国の王族の正当性、神聖さは、大陸随一と言っている。

自分もこつそりと参加していた手前そんなことは口が裂けても言わないが、そんな王族が内部抗争などとしていいわけがないのだ。

(それだって、対外的に見ればぎりぎりのラインだし。そして、もっと切実な問題は、あの王族がいないと南土はもたないということ)

大陸の勢力は、『南土』『央土』『氷土』の三つに大きく分けられる。

かつて起こった産業革命の発信点となり大陸経済の中心点として成り上がった、大陸中央部に位置する諸国連合が央土。

一年の大半が冬で、雪と氷に包まれた厳しい環境で貧しいながらも広大な領土と強大な軍事力によって圧倒的な存在感を示すのが氷土。

それらに比べて、南土の国々には決定的なものがない。大陸南部諸国の総称である南土は、地域により多少差はあれ、平坦な大地に温暖な気候と豊かな土壌を持つ。農業をはじめとする第一次産業が豊かだが、それだけだ。

農業のしやすい土地柄は、文化的に発展しにくいという側面を持つ。なぜなら、工業の中心である第二次産業を發展させずとも、これまで通り第一次産業に従事していれば十分に暮らしていけるからだ。

豊かな土壌を基盤とする国力を持つが、全体の技術、及び文化水準では央土に劣り、豊かさゆえに危機感が薄く軍事力では氷土はるか央土にも後れをとる。そんな国家が集まっているのが南土と呼ばれる地域だ。

同時にそれは、他から見れば搾取の対象となるということでもある。豊かな癖に、弱い国々の集まる地域。野心溢れる強国にとってはまさしく垂涎的だっただろう。

特に央土。大陸最大の軍事力を誇る北からの圧力に常に晒されている彼らが、すぐ隣にある豊かな南土を植民地にしようとするのは当然だろう。産業革命が起こって以降特に、央土の経済成長は目覚ましい。国力に差をつけた彼らがのんびりと農業にいそしんでいた南土へ侵略してきたのは、半ば決まっていた運命だった。

それが原因でおこったのが、一世代前の戦乱だ。南土は一時期央土にほとんど占領されかけた。南土の国々が立て続けに敗北したのは、物量の差であり、兵器の差であり、戦略の差であり、経済力の差だった。

最後に最南端にあるこの国のみが残り、誰もが央土による南土平

定を確信した。

そして、央土の諸国連合は、ただ一国に敗れ去った。

原因は、いくつがある。

央土内で、南土の領土分割の条件交渉が原因で、いささか内部分裂を起こしていたこと。同時にそれを好機と見た氷土が央土に侵略してきて、そちらの対応に気がそれたことも大きいだろう。

だが、何よりもあの変態王族たちの力は無視できないほど多だった。侵略していた央土の軍隊をほぼ真つ二つにぶつた切り、戦線を崩壊させた。相手が混乱しているうちに、散りじりになっていた諸王国の兵をまとめあげ、フィリカ王国の指揮のもと央土の侵略に對抗。最終的には南土の境界線まで押し返した。

フィリカ王国は戦線を押し返した後、攻め滅ぼされていた南土の各国を藩属とすることによって各々の領土に返還した。そのおかげで、大陸最南端の小国でしかなかったフィリカ王国は、一気に南土の宗主国となることになった。

この国の王族は、南土の要だ。

彼らがいなくなつては、フィリカ王国どころか南土そのものがないかねない。

(やっぱり王族は殺せないかな……。いや、もともと殺すつもりはないけど)

やや潔癖な性格のティアとしてその身分だけでなく、王族のことは人格的に尊敬しているのだ……。あくまで、その性癖を除けばという条件付きで。ちなみにティアを欺いていた元王子で現在トカゲになっているどっかの誰かに対しては、本気で死ねばいいと思っているが。

一番いいのは、この国の政治から王族を完全に隔離すること。実

権を何も与えず、象徴としての王族として飾り立てることだ。

だがそれは、あまりにもムシのよい話である。

なぜならば、フィリカ王国の王族は、南土が侵略された際には真っ先に前線へと駆けつけなければならぬ義務がある。

（フィリカ王国に敗北したのは、央土にとっては手痛い失敗。だからこそ、央土に対する牽制として与えられている南土全土での統帥権。そして、有事に南土をまとめるために絶対無比の効力を発する、勅命という伝家の宝刀）

かつてに比べれば経済的基盤はしっかりしているが、それでも南土は央土には劣る。いま南土をまとめている仕組み上、統帥権の剥奪など不条理といってもいい。王族に南土全土の統帥権が与えられているのは、王族だからという理由だけではない。軍事において彼ら以上に貢献できる人間が、また央土に恐れを持たせられるだけの力を持つ人間がフィリカ王族以外にいないことを、さきの戦乱において証明して見せたからなのだ。

フィリカの王族に南土の統帥権がある理由は、名実ともにそろっている。この発案は、交渉の壇上にすら拳がらない。

そもそもいまだって、王族はほとんど国政にかかわっていないのだ。

この国の頂点たる彼らは、総じて権力に興味がない。軍事には絶対的な権力を浸透させているが、行政、司法、立法にほとんど関わっていないのだ。フィリカ王国の王族は代々「君臨すれども統治せず」が原則である。ティアだって権力に野心があるわけでもないが、それでも王族の欲のなさには驚いた。

なんというか、彼らは自分たちの国土が守られ、その理解しがたい性的欲求が満たされていればそれで満足なのだ。統帥権があるのは、南土に安心感を与えるためだ。その強大な力をふるったことはない。やることといえば、その異常な性的思考からくるわけのわか

らない勅命とか意味のわからない奇行だけだ。その頻度も、決して多くはない。

その唯一が多大な迷惑なのだが、絶対王政による完全な恐怖政治を敷く氷土の王族などに比べれば、慎ましいものである。ティアの懊悩など、ぜいたくな悩みと言い換えてもいい。

(いつそ央土あたりと通じて、侵略の手引きでもしてこの国をなくしてやるうか。……いや、もっとダメだ。伝手がなし)

それ以前に、いくら王族　　というか王子もどきのトカゲ　　憎しとはいえ、さすがに売国奴になる気はない。ティアは、それなりにこの国を愛しているのだ。

考えれば考えるほど、革命の必要性などない気がする。必要性が存在しないということは、確固たる思想がないということにもつながる。政治的な革命において、思想は動力源だ。思想がない革命など、ありえない。

しかしそれは、王族がこれ以降も君臨し続けることを肯定するしかないということだ。あの変態どもが、これからも、この国の、頂点で、あると、いう、ことだ。

まあ、それは許そう。いまの情勢での王族の必要性はいまさら疑うまでもない。エリザベス女王のことだって敬愛している。これから先に生まれていくだろう変態王族も好きに生きればいいと思う。

しかし、一個だけ問題があるのだ。

(それだと、あのトカゲを殺せない……！)

そこである。

それだけ、ティアはどうしても許せない。あのトカゲが同じ国土にいるというだけで、ハラワタが煮えくりかえるような怒りがふつふつとわいてくるのだ。

ティアがそんな思考のドつぼにはまっていると

「あ、あの」

目の前に座るエレンが声をかけてきた。

「……なに？」

ティアは問い返しつつも内心で首をかしげた。

基本的に目下の人間は、用がなければ目上の人間に話しかけない。純然たる身分さと上下関係があれば、それはなおさらだ。ティアはそこまで気にしないが、向こうから話しかけてくるのは勇気がいっただらう。それを盾にして、一人で静かに考え事をしていたのである。

「もしや、ご気分でもすぐれないのでしょうか」

「ああ……違う。ちょっと考えごとをしていただけ」

たぶん、黙り込んでうつむいているティアの様子から、乗り物酔いをしたのだと勘違いしたのだらう。

さすがに、申し訳ない気持ちになる。身分差を盾に、相手にとっては気まずい空間を作って放置していたという自覚もあるからなおさらだ。

思考に沈んでいた頭を切り替える。普段は無愛想で無表情だし、わりと腹黒い内面をしているが、目下の相手への気遣いはきちんとするのだ。あくまで『仕事の上では』という注釈つきになるため、プライベートでしかないいまはそれがやや欠けている。

「黙り込んでて悪かった。何か聞きたいことがあるなら、何でも言っ
つて？」

「それでしたら、あの……」
「どうしたの？」

エレンにとって、ティアは主人。名実ともに格上の相手だ。口ごもるのも無理はないだろう。それをメンドクサイと思わなくもないが、メイドの相手は主人としての義務でもある。自分を納得させたティアは、言葉の先を促した。

エレンはそれにつられ、意を決したように口を開く。

「あ、あのつ。お嬢様のご結婚は、いつになるんですか!？」

「ごん、と痛そうな音を立てて、ティアの頭が窓枠にぶつかった。

「だ、大丈夫ですかっ？ 頭をぶつけられるなんて、そんな鉄道が揺れましたか!？」

「あ、ああ、うん。平気。別に揺れのせいじゃないから気にしないで」

ティアが頭をぶつけたの原因を、列車が揺れたからと勘違いしたらしい。どちらかというと、原因は目の前のこの娘なのだ。

「で。なんでいきなり結婚なんて話になるの」

あまりの質問に、目下への気遣い放棄してぶっきらぼうに尋ねる。だが、遠慮を捨てて目をきらきらさせているエレンはそんな主人に気が付いた様子もない。夢見る乙女の表情で続ける。

「だって、王宮での奉公を終えて館にお戻りになるといことは、そういうお話があったのではないのですかっ？」

「ああ……」

そう言われれば、納得もできる。

確かに王位についたエリザベスのお付きを唯一許されていたティアがわざわざ帰って来たとなると、そういう想像が膨らんでもおかしくはない。

ティアは諜報活動という裏の目的のため出向していたが、ふつう貴族の令嬢が王宮に奉公する目的は、世間や教養を学ぶため、何より王宮付きであったという嫁入りの際に有利になる箔付け、もしくはもっと直接的に、王宮に仕える将来有望な役人や軍人を結婚相手としてゲットするためなのだ。

とはいえ、そんな浮いた話は残念ながら存在しない。諜報目的で王宮に奉公したティアが王宮で作った縁といえ、おいそれと口外できないようなものが多い。

しかし

「そっか……」

そうだ。なぜ気が付かなかったのだろう。やはり、一人の思考などたかがしれてるなと反省し、大切なことを気が付かせてくれたエレンの手を握る。

「ありがとう、エレン。あなたのおかげで道が開けた」

「へ？」

いきなり手を握ってきたティアにエレンは目を白黒させているが、かまわなかった。うん、そうだ、とそれに気が付かなかった自分に視野の狭さを笑う。

自分は、女なのだ。

女王が存在するという国柄、男女の格差が少ないフィリカ王国であっても、政治は基本的に男が動かすものである。女のティアが頭

を悩ませて変態王族とかこの国の政治とか大陸の情勢がどうか、もう考える必要はない。ぶっちゃけメンドクサイことはすべて男に押し付ければいいのだ。生きるために働く必要はないのだ。全部ほうりだして、どうか適当な相手と結婚してあとは慎ましく暮らせればいいのだ。

（うん。いわゆる、隠居というやつだ。外国の……氷土は絶対に行きたくないし、南土だとかこの国の王族の影響が大きすぎるから……できれば、央土。うん。央土諸国の貴族が有力な商人を捕まえて、この国から逃げよう。そしてトカゲのことは、忘れよう）

ティアの結婚を隠居とし手段とするその、ある意味ではとても貴族らしいが、残念ながらちっとも乙女的ではない考え方。また、三年に渡る王宮でのメイド生活において、男にはいつさい目をくれず諜報活動にいそしんでいたという実績。そしてなにより、自分の初恋にも気が付けないような鈍さと疎さ。

世の中、そんな思考と行動の持ち主がそう簡単に結婚できるような仕組みになっていないというのを思い知らされるのは、もうちょっと後のことだ。

第二話 大陸という複雑怪奇に入り組んだ情勢について（後書き）

別に複雑でも怪奇でもない、いたってシンプルな大陸情勢でした。

鉄道が走っていることからお分かりのように、中世じゃなくて、近世です。イギリスで言うヴィクトリア期、日本という明治維新あたり。魔法もあるけど銃もある世界観ですが、基本、科学寄りです。

ここで書いた基本設定ですけど、これからちよちよいと書き換えるかもしれません。その時は「設定の都合が悪くなったのか……」と生暖かいめで見守ってやってください……。

第三話 メイドという主に従順なはずの職業について

「おかえりなさいませ、お嬢様」

そう言っただけでティアの帰宅後に部屋でくつろいでいる彼女のもとにきたメイドは、リリアという。穏やかながらも大人びたその容貌や、金髪を肩口で切りそろえているその髪型は珍しく目を引く。

「ただいま。久しぶり」

王宮ではメイドをやっていたティアだが、実家に帰ればかすずかれる身分である。リリアはティアが王宮に行く前からこの家に勤めている。まだ二十半ばの女性だが、祖父の信頼も厚い優秀なメイドである。この若さで使用人の取りまとめ役であるハウスキーパーをこなしている。

ティアの言葉にリリアはにっこり笑い

「三年ぶりですね。控^{むく}えめで慎^{おそ}ましやかなご性格はご健^{けん}在なようで、安心いたしました」

そして、台詞の行間に率直な本音を挟むのが非常にうまい二枚舌の持ち主である。

「リリアも相変わらずな性格で」

「お褒めいただきまして何よりです。エレン。あなたもお疲れでしたね」

無然とするティアをあっさりスルーし、エレンに声をかける。後ろでもたもたと荷解きをしていたエレンの背筋がぴんっと伸びる。

「は、はいっ」

「道中どうでした？」

「はいっ。お嬢様にもよくしていただきましたし、自分の経験不足を色々と思い知らされました！」

「そうですね。ところで」

一見笑顔に見えるリアの瞳の奥で、きらりと鋭い光を放たれた。

「なにか粗相ソドをしていませんよね」

「そ、そのようなことは……」

笑顔で迫る上司からの追及に、エレンの目がすいーっと泳ぐ。わかりやすいぐらいに隠し事が下手である。

その会話に、ティアは少し苦々しい気分で道中を思い出していた。

(ドジといえば……)

さんざんだったのだ。帰りの手回しが全くできていなかったことに加え、道を歩けば方向を失うわ転びそうになるわ、荷物を持たせれば中身をぶちまけかけ、鉄道に乗れば切符を落とすようになったりしていた。正直、ティアがフォローしなかつたら帰れなかつたに違いない。付き人という名目で来ているはずなのに、はつきり言って邪魔以外の何物でもなかった。

慣れない主人と土地に緊張しているのだろうと思っていたが、リアのこの尋問を見る限り、あれがエレンの素のようだ。

「そのようなことは？」

「あつう………しましたあ」

縮こまりつつも正直に白状する。どうせここで嘘をついても、後でティアから暴露されることだ。それを考えれば、賢明な答えである。

だが、賢く答えたとしてもそれが常に問題を回避してくるわけではない。

案の定、リリアは、はあと嘆息した。

「エレン。わたしたちは雇われの身でしかありません。主とメイドなど、所詮は契約おかねとおかねので縛られた関係。ですから別に主に絶対の忠誠を尽くせなどとは言いません」

「はい」

説教にしてもやたら率直な意見にしても、そういうのは主一家のいないところで言うべきことである。

よそでやってくれないかな。そんなことを思いつつも、蚊帳の外のティアは二人のやりとりをぼうつと眺める。リリアがわざとティアの目の前でああいうことを暴露しているのは承知しているから、言っても無駄だろうとあきらめているのだ。

「ですが、お金を頂いて仕事を任されているのです」

「はい」

「だというのに任された仕事も満足にこなせない。まして器物を破損する。経験不足は仕方ありませんが、これらはそれ以前の問題。そんな人間むのうに賃金を払う価値はありません。ですから、失敗の分だけ、罰さめつりよせんびきを与えようと言いましたようね？」

「ゆ、許してください！ 後生です！ 今月のお給金は、もう雀の涙ほどしか残っていないんです！」

「大丈夫ですよ。安心なさい」

エレンが必死に嘆願する。同情を誘うに十分な仕草だったが、リ

リアの笑顔はちつとも揺るがない。

「もうちよつとぐらいはありますよ」

「そんな！」

「マイナスという手だつてあるんです」

「そんなあ！」

とうとう涙目になり始めたが、理由が理由だけに全然同情できない。ただだけ失敗してるんだという話である。

しかし、そろそろ飽きてきたのも事実だ。目の前で繰り広げられる寸劇を、ティアは「ふう」とため息をつくことで遮った。

「リア。おじい様に挨拶をするから、そのぐらいにして」

新人いじめを見かねた、というわけではないがティアが助け船を出す。エレンの荷解きがやたら時間かかっていたので後回しにしていたが、そもそも帰って来てまずしいといけないことはそれである。

そこはリアも異論がないようで、あっさりと引き下がった。

「そうですね。取り次いでまいります。エレン。お嬢様の身だしなみを整えて差し上げなさい」

「は、はい！」

エレンがほつとしながら返事をする。

「では失礼します。あ、お嬢様。あとでぜひとも王都での土産話を
お聞かせくださいね」

いたずらっぽく笑いながら一分の隙もない、優雅な一礼をして部

屋を出る。

それを見送りながら、ティアは軽く眉をひそめる。

「リリアは相変わらず、性格が悪い」

あのメイドの性格は、ティアがいたところから変わっていないようだ。口を除けば口の打ちどころのないほどに有能だというのが、また性質タチ悪い。

エレンの失敗談でも話してやれば満足かな。さりげなくひどいことを考えながら衣装棚を開ける。

エレンが着替えの手伝いをしてくれるが、人に着せるのに不慣れなのが丸わかりだ。ティアが一人で着替えたほうが確実に早い。タイムリミットはリリアが戻ってくるまでなのだが、このままでは間に合わないだろう。

「エレンの勤め始めはいつから？」

「う」

ティアの質問に、エレンの手が鈍った。

「ふた月ほど、前からです」

「なるほど」

それだと、まだ積み上げの時期だ。本来ならば、下働きをする期間である。付き人をやれる経験はない。

仮にも子女の世話をするレディースメイドは、メイドの中でも上級職だ。それなのになぜ新人が、と不審に思う。

「申し訳ございません……」

もたつきを責められたと思ったのだろう。エレンがうなだれた様子で謝罪してくる。実際、責められてしかるべきな手際だったので、少し厳しくすることにした。

「謝るくらいなら、ちゃんと仕事をして」

着替えが終わったので、自分でイスを引いて鏡の前に座る。それを見たエレンが慌てて櫛を取り出す。リリアだったら櫛にしてもイスにしてもティアが行動する前に用意するが、エレンにそれを望むのは難しいのだろう。

「ねえ」

「は、はいっ」

髪をすかしながら質問する。心地よいとは言えない手つきだが、これ以上は責めるつもりはない。一生懸命丁寧にしようとしているのは伝わるからだ。

「エレンって、もともと何で雇われたの？」

「えっと。パーラーメイドです」

一口にメイドといっても、その仕事は細分化されている。メイドの中でもちゃんと役職が決められており、上下関係は存在する。パーラーメイドは、その中で給仕と来客の取次をするのが主な仕事だ。接客担当だから、容姿がいい者が採用されやすい。まっすぐに伸びた、手触りのよさそうな栗毛。可愛らしく整った顔立ちは、年の割にちよつと幼い感じもするが好みだろう。むしろ可愛げが増すかもしれない。

なるほど、エレンの見た目ならそれは納得だが……

ティアはエレンの顔をしげしげと眺めた後、ぼつりとつぶやく。

「……お客様にお茶でもかけた？」

「はい、ご明察で……。熱いお茶を、頭から……」

「……」

「しかも頭に茶器までぶつけて、お客様を気絶させてしまって……幸いというべきか、頭をぶつけたせいかな、その時のお客様の記憶が飛んでいて大事にはなりませんでした」

エレンはうなだれながらも語る。せいぜい服にこぼしたぐらいだろうと思っていたティアは、予想の斜め上をいくドジっぷりに思わず口を閉じてしまった。というか、気絶とは。いったいどんな勢いでぶつかったのだろう。

「リリアさんにごつてり絞られて、その後スカラリーに格下げされたのですが……」

スカラリーメイドは食器洗いなど厨房の掃除を行う専門職だ。メイドの中でも地位が低いし、かなり薄給である。

しかし厨房はコックの領分であるから、本来ハウスキーパーであるリリアの権限が及ばないはずなのだが、なにか無茶を言ったのだろうか。それともリリアの権力が厨房までに及んでいるのか。どちらかというところ、後者の気がする。

「そこでは食器を割りまくったと」

「いえ、それもあるんですが……その、ボヤを起こしてしまって……」

「それはまた……」

もはやかける言葉も見当たらない。エレンも自分の失敗談が情けない自覚があるらしく、話すごとにだんだんしょぼくれてきた。

しかし聞けば聞くほどあきれられる内容である。

(……よくリリアもクビにしなかったな)

本人の手前、口には出さないでおいたが、ティアがそう思っ
てしまっても仕方がないほどの失態の数々だ。

ハウスキーパーは、メイドの人事を任される立場である。当然、
部下であるメイドが失敗すれば上司である彼女が責任を問われる。
ティアも王宮にいた時には上級メイドとして多少の人事を任される
こともあったが、そんなポカやらかす奴がいれば、即刻やめさせて
いる。食器を割るくらいならまだしも、ボヤはない。

「このままではやらせられる仕事がないとリリアさんも頭を悩ませ
ていたようなんですが、ちょうどその時にティアお嬢様のご帰還が
ありました……」

「それでレディースメイドに格上げ、か。運がいい」

「はい。わたしの他に、お嬢様の身の回りを世話できるような、適
当な年齢のものがいなかったというのと、傍にいて見栄えがいいだ
ろうと。……ただ、いくつかのあるはずの仕事と本来ある特権は取
り上げられています。あと、給料もスカラリーの時のままです……」

悲しげに言うが、クビにならなかったただけ幸運である。エレンも
そこは承知しているのか、声は悲しげでも愚痴る様子はない。

「実家は何をやってるの？」

「もとは商家でした、けど、その……」

エレンが口ごもる。基本的に商人は平民のなかでもかなり裕福な
部類だ。もちろんピンキリだが、資産で貴族を優に上回るものも多
い。その娘がメイドなどやっているからには、相応の事情があるの

だろう。

「言いにくいなら、別に無理しなくてもいいけど」

「いえ、大したことじゃないんです。詐欺にかかって、一転、借金持ちになっただけで……」

「そう……」

実家の傾きも、もしやこの子が原因じゃないか。いままでのドジっぷりを見ているとそんな邪推をしてみたが、さすがに関係ないだろう。

暗い表情になったエレンに、問いかけてみる。

「……エレン。メイドの仕事は、つらくない？」

綺麗な手を見ればわかるが、苦勞とは無縁の裕福な環境だったのだろう。あの壊滅的なドジっぷりも許せるほどに。そんなお嬢様が、人のために動きささいな失敗で叱られるような立場に転落したのだ。さぞかしつらいに違いないだろうと、さして同情もせずなんとなく口にしたのだが

「いえ、楽しいですよ」

声を弾ませて答えたその表情は、一片の曇りのない笑顔だった。意外な返答に一瞬だけ目を見張る。

「いろんな人と知り合えました。いままでやれなかったことも、いろいろできます。たぶん、あのままだと経験できなかったことがいっぱい。だから、不幸なんかじゃないです」

「……そう」

繕ったわけではない、気丈とはまた違う笑顔。それに、エレンの人柄を感じて口元をほころばした。なるほど。これは、リアアがクビにしないわけだ、と納得する。

「お嬢様も王宮でメイドをされていたんですね。どうでしたか？」
「つらいことも一杯あった。理不尽にもさらされた。なんであんなことをやってるのか、疑問に思ったこともあった」

隠すようなことでもない。正直に話す。特に最初の一年の王宮生活は、決して面白いものではなかった。エリザベスの世話の間を縫って他の下働きの仕事もこなしていたあの生活は、かなりの激務でもあった。

それでも王宮の生活に耐えきれたのは

「けど、なんだかんだで、主が良かった」

変態だけど、というのは国家機密に該当する秘事なので、決して言葉には出さない。

特に直接主人に仕えるメイドというのは、主の人柄によって仕事への思いが変わる。主が悪ければイコール仕事場が悪いということになるし、その逆もまた然りだ。

いまは自分がエレンの主なのだ。ならばできるだけ、自分も頑張ろう。

そんな決心をしていると、ふと、エレンの目がきらっきらに輝いていることに気が付いた。

「主って、エリザベス女王様ですよねっ。どんな方なんですか！」
「……」

言われてみれば、彼女はいまフィリカ王国でもっとも有名な人間

なのだ。多少興奮してしまうのもわかる。

「基本、優しくて淑やか。王宮内の評判もすごい、いい。人徳もあるし、人を見る目もある。猫かぶりがうまい。それと」

言っただけいいこと悪いことを頭の中で分けて答えながらも、ふと芽生えたいはずら心から、余計なことを付け加える。

「ノックをしないで部屋に入ると、すぐに仲良くなれる」

「ノックを……？」

当然その言葉の意味がわからないエレンは首を傾げる。ティアもわざわざ説明する気はない。

しかし、中流階級とはいえ、裕福な家庭ならば貴族と通じるところもあるだろう。どうせならと思って尋ねることにする。

「ねえエレン」

「はい？」

「恋人とか、いる？」

「残念ながら、これでも元は箱入りでしたので」

「そう。じゃあ、結婚って、どうやるか知ってる？」

「……………は？ その、いま、なんと？」

聞こえなかったのだろうか。いま信じられないことを聞きましたけど自分の聞き間違えですよ、という顔をしているエレンに、もう一度、今度はちょっと大きめの声で同じ質問を繰り返した。

「だから、結婚のやり方を教えて」

「……………え？」

エレンの目が点になった。

第三話 メイドという主に従順なはずの職業について（後書き）

三人称はやっぱり難しいなあとしみじみ思います。

そういえばこの間、資料にと読んだ本『ヴィクトリア朝の性と結婚』（中公新書）を読み終わった後の感想を、一言。

現実には、夢がないですね（危ない発言）

ということ、これは大部分が夢と希望と妄想でできたファンタジーです。

第四話 侯爵という責任ある立場にいる祖父について

ティアにとって、恩人であり尊敬すべき人物である祖父との面談は非常に緊張する。

メデイチ侯爵は、一言で表すならば巖のような人物だ。下の姉などは「あれで可愛いところがあるのよ」などと理解不能なことを言っていたが、ティアにとってみれば祖父は殿上人に近い。いや、むしろ心の距離としては、仕えていた王族のほうがまだ近いといってもいいかもしれない。

「ただいま戻りました」

「うむ」

挨拶のあと、二、三の報告をする。王宮の様子。王都にいる下の姉の様子。知っている限りのことをできるだけ詳細に伝える。とはいえ、もともと緊密に連絡を取っていたので、そう伝えることもない。

「ところでおじい様」

一通りの連絡を終え、本題ともいうべきことを切り出す。

「何だ」

「何か、私宛の縁談の申し込みなどはありませんか？」

びくん、メデイチ侯爵の片眉が跳ね上がった。

いま祖父に問うたのは、エレンから聞いた結婚する方法その一だ。ティアぐらいの身分と年齢ならば、縁談の十や二十は必ず届いているものらしい。むしろなぜそんなことも知らないのかと問いたたださ

れた。

(子供でも知ってる、淑女だったらたしなみ以前だ、と言われても知らないものは知らない……けど、おじい様はどうされたんだろう?)

貴族同士の婚姻は、保護者が決めてしまうことが多い。ならばそういった申し込みはすべて祖父のほうに回っているはずだ。いままでは特に興味もなかったが、もし都合の良い相手から縁談の申し込みがあつたら受けてしまおう。そう思つての申し出だったが、気のせいか、祖父が狼狽している気がする。

エレン曰く、子供でも知っているような事柄を口に出したただけだ。それなのにあの厳格でゆるぎない祖父がなぜ、と思つたが

「ない」

厳めしい顔で断言されてしまった。その声音はいつもと変わらな
い。

狼狽云々は、どうやらティアの思い込みだったようだ。

「そうですか……」

答えながら、落胆に少し肩が落ち込んだのは仕方ないだろう。ティアとて女の子なのだ。普通ならばあるべき求婚がないとなるれば、それなりにショックである。

(そんなに魅力ないかな……まあ、こんなのとぺり顔じゃしかたないか)

つるりと自分の顔をなでながら思つ。

四人いるメデイチ家の子弟の中で、ティアのみ異大陸の血が混じっている。この大陸では珍しい黒髪黒目もそうだし、肌の色も他と比べて少し濃い。それに顔立ちも、この大陸の人間に比べて彫が浅くなっている。

(器量もよくないし、妾腹でしかもそれが異大陸の人間……壁は多い、か)

しかしそれでも侯爵家の人間なのだ。積極的にこちらから仕掛ければ、もの好きがいるだろう。

「では、何かしらの招待状などは届いていませんか？」

エレンからの伝授その二。積極的にパーティーなどに行って知り合え。そして男を捕まえる。

大変わかりやすい教えである。

「それならば心当たりはあるが……ティアよ」

「はい」

「先ほどからの質問は、なんだ？」

祖父の問いに、ティアは小首を傾げた。

ティアは知らなかったが、淑女のこういった行動は一般常識だぞうだ。ならば祖父が知らないはずないと思うのだが。

少々不審に思いながらも、ティアは正直に答える。

「結婚するために活動しようかと思ひまして」

「……………」

当然のことを言ったただけのだが、ずんと重い沈黙がメデイチ侯爵

を包んだ。

気のせい、ではなさそうである。ティアはそんな祖父の様子を怪訝に思いながらも、ふと思いついて言葉を重ねる。

「もしよろしければ、おじい様からどなたかご紹介していただけますか？」

「……………考えて、おこつ」

唸るように返って答えは、明らかに乗り気な様子ではなかった。

「ということだった」

「そ、そうですか……………つぶつぶ」

「うん。リリアはおじい様の様子に何か心あたりはある？」

「いえ、わ、わたしにはとんと見当も、くふ、つきません、よ？」

「そう。ところでリリア」

話を終えたティアは、さっきから肩をぶるぶると震わせて笑うのを耐えている金色短髪メイドに、じとつとした視線を送った。

リリアに祖父との面談の一部始終を伝えたのだが、縁談の件あたりからこのありさまなのだ。

「何がおかしいの？」

「いえ、くくつ。ただ、お嬢様の純粹じゆんじゆんさは磨き抜かれているな、と思ひまして」

ようやく笑いかみ殺し嚙下し胃の中に収めたエレンは、とてもいい笑顔でよくわからないことを言う。その表情には、大変面白い話をごちそうさまです、と書かれている。

さすがに意味も分からずここまで笑われればいい気はしないが、ティアにとってこのメイドの性格の悪さは今さらである。「あつそう」と、これ見よがしにため息を吐いて、話題を切り上げることにした。

祖父との面談を終えたティアは自室に戻っている。門前の掃除に行かされているそうで、エレンはいまこの部屋におらず、リリアと二人きりになっている。

確かにあそこの掃き掃除ならば複雑な手順もいらず壊すようなものもないが……まかり間違つて、馬車にひかれたりしまいそうで怖い。なんとなく心配になったティアは、窓をのぞいてエレンの無事を確認してしまう。

楽しそうに掃き掃除をするのんきな栗毛の頭が見えた。

「しかしお嬢様は、昔からお変わりないですね」

「そう?」

「はい。お嬢様が王宮生活で大人おとなになってしまわれたらどうしようかと心配していましたが、ここまでお変わりせいちょうしないのも、また素晴おもしろらしいものですね」

「……よくわからないけど、バカにされてない?」

「いえいえ。滅相めしやうありません」

リリアは人を食った笑顔のまま、綺麗な一礼で頭を下げる。

一発殴つてもいいかな。ティアは割と本気でそう思う。感情は0 Kとゴーサインを出したが、残念ながら理性がNOと言う。体罰は、ティアのポリシーに反するのだ。

……いやでもやっぱ殴ろう。

静かに堪忍袋の尾を切ったティアが、そつとこぶしを握り

「お嬢様。お茶をどうぞ」

「……どうも」

ティアの思考を読んでいるのでは、と思えるほどに絶妙なタイミングでリリアの言葉が入る。

カップに注がれた紅茶を勧められ、握っていたこぶしを解いて受け取る。香りを楽しんで、一口。腹立たしいが、王宮で自分がエリザベスに入れていたのに比べてもおいしい。先ほどまでの怒りが、すうつとどこかへ流れて行った。

「おいしい」

「ありがとうございます」

ティアの素直に礼に、リリアもまた素直に返礼する。

お茶菓子とセットになっているこれらは、ティアが部屋に戻ってくる前に用意してあった。エレンだったらこうはいかないだろうな。ややひどい、しかし正当な評価を下し、まだ温かいスコーンをつまみながら窓の外にいるエレンを観察する。

リリアはそんなティアの様子を見ながら、問いかけてきた。

「エレンはどうですか？」

「いま、エプロンドレスの裾を踏んで転んでる」

「それはまた、はしたない」

「そして勢いよく植木に頭を突っ込んで、枝を折ってる」

「後で庭師に頭を下げさせに行きませんと」

ほのぼのとお茶をしながら、ティアは先ほどのリリアの問いに答えた。

「……何であの子を？」

先ほどリリアから問われたエレンの評価を、ティアは疑問にして明確に表す。

いくら人がいなかろうと、あそこまで未熟な侍女など必要ない。リリアが彼女をクビにしなかったのはエレンの人柄だろうが、それはティアの付き人にする理由にはならない。例えば目の前にあるこの茶器をエレンに準備させたら、それはもう大惨事になること確定だ。

人事の不手際を問われたにも関わらず、リリアは後ろ暗いところなどありませんと言わんばかりの笑顔だ。

「お嬢様におしつぽびつたりだと判断したまでです」

「リリア……」

あまりに予想通りの答えに、ティアの声が思わず不穏になる。

だが、リリアの笑顔はそれにも微塵も揺るがない。

「何しろわたしはお嬢様を信用していますので。か弱いそんが子女ならともかく、ティア様ならエレンの不手際ドツの対処しりあもできますでしょう？」
「部下の世話は、リリアの仕事のはず。あれが傍付きのメイドになるぐらいなら、わたしは自分で家事をこなして一人で過ごす」
「そんな。良家の娘がそんなことではいけません。家の中でも手袋をして、家事など一切せずに優雅な遊びを仕事とするのが貴族の女というものです。それに」

ティアは静かにエレンの言葉の続きを待った。なぜならば、二枚舌も使っていない完全なる建前を申した後に付け加えられるものは、率直な本音以外にないからだ。

「わたしもいい加減、心労めんどりにが重なりまして」
「……リリア」

ティアは、ゆっくりと自らの侍従に問いかける。

「殴って、いい？」

リリアは、にっこり笑って自らの主に答えを返す。

「拒否ほつりよくはんたいいたします」

「死ね」

貴族の娘のものとも思えない、言葉汚い罵り。それとともに遠慮なくふるわれたティアの拳は、残念ながら空を切った。

身をかがめてあっさりティアの暴力をかわしたりリリアは、にっこり余裕の笑みを浮かべる。

「残念は・す・れ、ですね」

リリアの性悪な頭を殴ってやろうと立ち上がって拳を薙いだティアは、舌打ちだけして席に着きなおした。

「それにあの子、手際は悪いですが、運が良いんですよ」
「うん。だから何？ 運が良くても、わたしの侍女にする理由にはならないと思うんだけど」

「例えばお客様に茶器をぶつけて気絶させたことがあったのですが」
「リリア？ 無視？ というか、その話はもうエレンから聞いた」

何事もなかったように繰り出された話は、失礼を通り越して事件

になりかねない例の一件だ。たぶん、エレンのドジの中でも一、二位を争うだろう。

しかし、リリアはティアの追及など聞こえないものとして話を続ける。

「あのお客様は好色な方でしたので、つい不問にと思ってしまったのです」

「……………」

「さすがにかばえきれない失敗でしたが、幸いなことに被害を受けた方も記憶ない状態でしたし…………つくづく運の良い子ですよね」

ティアは無言で紅茶をすすった。このメイドとは、いっぺんことんまで話し合っておかなければならないことが多い気がする。とりあえず、追及はもう無駄っぽいので話に乗っかることにした。

「でも降格されたってきいたけど？」

「あれは絨毯を汚した罰です」

リリアは一切悪びれもなく白状する。

「そう…………」

確かに絨毯のしみ抜きは大変だ。そんな問題の本質とはズレた思考は、ただの逃避でしかないということぐらい自覚している。

しかし、と思う。

あのメイドのすまし顔をたたき割れないものだろうか。ティアはその方法を検討して、ふといいものを持っていることを思い出した。

「リリア。荷物の中に封筒が入っていないかった？」

「それでしたら机の上に置いておきました」

打てば響く答えが返ってくる。荷解きは、やはりエレンでは終わらせられなかったようでリリアが進めたらしい。
やっぱりなと思いつながらティアは机の上を確認する。

「うん、確かに。……はい、あげる」

「お土産ですか？」

リリアはティアからやたら分厚い封筒を受け取りながら、にこやかにそんなことを言う。

……このメイドは主人に何をもとめているのだろうか。うん、金か。

ティアはそんなわかりきったことを考えながらも、リリアの急所というべき単語で答える。

「アンジェラ姉さまからの、手紙」

メイドチ家次女の名前を出すと、ぴしりとリリアの笑顔が固まった。

それを見て、表情には出さずに内心でくすりと笑う。大成功である。リリアの様子に、ティアは淡々と、しかしできる限りのいたずら心を一杯に込めて言った。

「どうぞお読みになってください、お義姉さま」

ティアの追撃に、リリアの固まった笑顔が、ぱりりと音を立てて砕けそうになった。

「お、おじよ、う、さま？」

饒舌なリリアらしくもなく、その言葉を引き出すだけの動作がやたら鈍い。リリアの体の関節が、ぎぎぎ、と錆びた車輪のような音を立てている気さえする。

リリア・ウィング。貴族であるものの、没落しかけているウィング男爵家の次女。彼女は、壮絶なる恋愛の末にウィング家の長男と結ばれたアンジェラの義妹になる。

つまりはティアの義姉にあたるのだが、リリアは自分の義姉であるメディチ家の次女アンジェラをものすごい苦手にしている。

とりあえず、壊れかけなリリアの笑顔にとどめを刺しておくことにした。

「お嬢様だなんて、水臭いです。どうせなら、これから義妹と呼んでくださいな？」

とうとう、ばりんという破碎音を立ててリリアの笑顔が砕け散った。

「そんなことをするぐらいでしたら、舌かんで死に雲隠れします」

「あっそう」

あんな良い姉さまなのに、何でそんなに苦手なんだろう。完全に笑顔が崩れ落ちて無の境地に達しているリリアの心境を不思議に思いつつも、ティアはカップを持ち上げてお代わりを催促する。

「……どうぞ」

「ありがとう」

珍しく無表情なリリアによって注がれたその一杯。

勝利の味は、なんだかとても渋かった。

第四話 侯爵という責任ある立場にいる祖父について（後書き）

ヴィクトリア朝の服飾を勉強中。ぶっちゃけ洋服描写が全然ないのは、まだ全然知識がないというそんな理由からです。情景描写もそうですけど、そっちはまだまだ……。服飾については興味深いことも多くて、へー、ふーん、と感心することも多いです。

しかし、なにより一番思うことは

これ全部書くのはメンドクサごほんげほん。

……うん。もうちょっと知識いれたら、順次作品に反映させていきたいと思います。

小説 真・侯爵という責任ある立場にいる祖父について

夜。

机の上でももされているランプの明かりを頼りに、リリアは手紙を読んでいた。

ハウスキーパーの特権のひとつとして、個室が与えられるというものがある。住込みが基本のメイドは、基本的には相部屋から四人部屋。それも、決して広い部屋ではない。その中で個室に住むというのは、かなりの厚遇なのだ。

リリアもその例にもれず、きちんと部屋を貰っている。そこで義姉であるアンジェラからの手紙を読もうと努力していたのだが……なにせ、封筒を分厚く膨らませていた手紙だ。量が半端ない。そして何より、内容がひどい。

フィリカ王国では都心部でも識字率は六十パーセントほどだが、貴族の端くれであるリリアは教養として読み書きを習得している。世の中、自分の文字も書けない人間が多く存在する。そんな中で当たり前のように教育が受けられた自分は幸運なのだ。それはリリアだってわかっている。教育を受けるということが、非常に恵まれたことなのは、わかっているのだ。

だが、いまだけは自らに与えられた教養という恩恵を呪っていた。この文字が、読めなければいいのに。

アンジェラからの手紙を前にして心の底からそう思うのだが、読まなくてはならない。きちんと読んで返信しないと、アンジェラは恐るべきことに、すねるのだ。いい年したいい女が、子供のようにしかも、それを放っておくと直接会いに来る。なんでなんでお返事してくれないのと言いながら、涙目で迫ってくる。

リリアにとってそれは、鳥肌ものを通りこして心臓が自爆しかねない光景である。なんとしてでも阻止しようとしているのだが、内容がもう読んでて疲れる。結婚生活五年目にもなっただけなのにラブ

ラブなのはよくわかったが、身内ののろけなんて読んでいても胸焼けするだけだ。

「アンジェラ様に、ティア様の可愛げのなさを分けて差し上げたい……！」

そうすればもっと扱いやすくなるのに。そんな思いで頭痛がし始めた頭を押さえながら唸る。

そうやってざーざーざー口から砂を吐きながらもなんとか半ばまで読んだところで、リリアは手紙をたたんだ。

読むのがつらかったからではない。そもそも最初からこの手紙には苦痛しかなかったのだから、そんなのは今さらである。

屋敷を見回る時間なのだ。鍵を管理するハウスキーパーにとって、大切な仕事の一つである。

手紙はまだ読み終わっていないが、私事で仕事をおろそかにするわけにはいかない。続きはまた明日に回すことにし、リリアは机の上に置いてあった灯りを持って立ち上がった。

一室一室、鍵を確認する。たまには部下であるメイド達の寝室を抜き打ちでチェックすることもあるが、今日は非常に疲れているのでやめておいた。

そうやって屋敷を点検していると、ある一室から明かりが漏れているのに気が付いた。

メデイチ侯爵の私室からだ。火の消し忘れだろうか、と覗き込んだのが運のつきだったのだろう。

「……リリアか」

ティアの祖父、メデイチ侯爵がそこにいた。

夜の部屋に二つの影があった。暖炉の火によって、その影はゆらりゆらりと揺れている。

一人はこの屋敷の主、メデイチ侯爵である。

もう一人は、リリアだ。主の晩酌に付き合うべくきちんと場所を整えた彼女は、侯爵の向かいに座っていた。本来ならば同席できるような立場ではないが、侯爵によって半ば無理やり着席させられていた。

こういうのは執事の仕事だと思うんだけどな。内心で愚痴りながらも、表情はにこやかな笑顔なのがリリアという女だ。

「ティアの王宮生活も終わったか……あの娘は、予想以上に優秀だったな。王宮にずっとしてもらいたかったほどだ」

「左様ですか」

適当に相槌を打ちながら、リリアは主の杯を満たす。

メデイチ侯爵は、机の上に置いてある燃料を一掴み分、暖炉に放り込む。可燃性に優れるそれらはあると、という間に灰になった。

本来ティアに任せられた情報収集など、王宮での噂を集めてくればもうけもの、程度のもだったのだ。

それが、送られてきたものは、スパイも真つ青な内容だったのだ。驚いたのなんの。機微に疎いくせに、任された物事を反射で必要以上にこなせてしまうティアの有能さは、危ういものがある。

「ところで新しく入ってきたメイドの様子はどうなのだ」

「彼女ですか」

メデイチ侯爵がわざわざエレンの尋ねてくるのにはわけがある。

非常に目立っているのだ。もちろん、悪い意味でだが。

「一応、身元を確かめました。が虚偽はありませんでした。もともと両親は外国にいたらしいのですが、祖父の代で事業が破たんしたそうです。再起を図るためにこの国に来て、貿易会社を設立。そこそこ成功したところで、詐欺にあつた、と」

しかもこの詐欺が巧妙で、契約書の裏をかき、法律にひっかからないように行われていたらしい。犯人は雲隠れしているが、見つげ出したとしても訴えるのは難しいだろう。詐欺にかかったのをエレンの両親の落ち度、というのは厳しい意見だ。相手が悪かった、としか言えない出来事だ。

「仕事面に関しましては……まあ、使えない娘です。しかし、あそこまで邪気のないものも貴重です」

リリアがエレンの価値を認めるのは、その一点のみだ。

残念ながら、住込みのメイドの窃盗などは珍しくない。また、小遣い稼ぎの感覚で屋敷の情報をもよおす不届き者もいる。それを抑えるのもリリアの仕事になるが、やはり一番効果的なのはそもそもそういうことをしない人間を雇うことだ。

もっとも、予想以上に器物破損の被害が重なっている。いまはやや後悔している。折よくティアが戻ってこなかったら、解雇も検討しなければならなかっただろう。

「何の仕事も任せられないような娘ですが、お嬢様の有能さと足し合わせればちょうどいいでしょう。お嬢様はなんだかんだで世話見がよろしいので、相性はいいかと思われます」

上手くいけば、きっと主従という関係以上に仲良くなれる。そう

いう期待を込めての人事だ。エレンの出す被害もティアが押さえこんでくれるだろうし、一石二鳥である。

「そうか」

「はい」

沈黙が下りる。

ぱちぱち、と暖炉の中でまきがはぜる音がする。メデイチ侯爵がまた一掴み、暖炉の中に燃料を放り込む。暖炉に放り込んでしまうには少々上等なそれらは、もともとくべられているまきなどより遙かに早く灰になる。

「ところでリリアよ」

「はい」

ぴん、と空気が緊迫したのに気が付いたが、あえて知らぬふりをする。空いたグラスに酌をしながら相槌を打った。

「ティアが、結婚をしたいといってきたのだ」

「はい。お嬢様もそういう御歳でしょう」

言われなくとも、リリアはティアから全部聞いている。リリアからすれば、へそで茶を沸かせるようなちゃんちゃらおかしな話だが、そんなことはおくびにも出さずに答えた。

「そうか……しかし、わしは、どうすればよいのだろうか」

あつという間に飲み干された器をまた満たす。このお酒、けつこ
う度が強いけど大丈夫かな。そんなことを思いつつも、従順なメイドであるリリアはそれに対して意見することもない。

「お館様がなさりたいようにするのが一番です」

「リリアよ。おぬしはわしにとってみれば娘のようなものだ」

「……」

一瞬だけぴたりとリリアの動作が止まってしまったのは、できれば思い出したいくない人物が想起されたからだ。

「恐縮です」

どうも酔いが回ってきたらしい。過分に与えられた言葉にそう判断しながらも、淡々と酒を注ぎ足す。顔は笑顔を保っているもの、答えるリリアの言葉がやや苦々しくなってしまうたのに、侯爵は気が付かなかつた。

「そのおぬしにとってみれば、ティアは妹のようなものだろう」

「そうでございますね」

メイド生活によって鍛えられたリリアの二枚舌は「いや別に」という内心とは裏腹の言葉を紡ぐ。率直が旨のリリアだが、わきまえるときはわきまえるのだ。

「おぬしの義姉のアンジェラも、それは出来がよかつた」

「………そうでございますね」

酒によってだんだん饒舌になっていく侯爵に対し、リリアが平坦な口調になってしまったのに、他意はない。確かにはたから見ている分では、リリアの目から見てもアンジェラは素晴らしく魅力的な女性ではあるのだ。その客観的な事実は否定できないし、主観的な感情を晒すつもりもなかつた。

「あの娘が家出同然で結婚していったときには、それは胸が引き裂かれるような思いだった。ひとつ、よかったことをあげれば、リリアよ。お前のような孫が新たにできたことだ」
「……………そうでございますね」

あの時は、それはもう上へ下への大騒ぎだった。リリアは遠い目になって当時の苦勞を思い出す。

まだ働いていなかった自分をおいて、実家はどたばどたばた大混乱。自分たちよりはるかに身分の高い娘さんを、相手先の許可を貰わずに連れてきた兄を前にして、顔を真っ青にした両親の様子は、いまだありありと思い出せる。父親など、これでウィング男爵家も終わりだ、と嘆いていたほどだ。

それからなんだかんであって、リリアは実家から離れてこの屋敷に奉公に来た。過程はともかく、理由は簡単。
アンジェラのいる実家にいたら、きつと精神が崩壊すると思ったからだ。

「わしは、かわいい孫娘を嫁になどやりたくないのだ……！」
「そうでございますかー」

苦渋に満ちた表情で、侯爵はさきほどから暖炉に放り込まれている机の上の燃料　ティアへの縁談の申し込みの手紙　を全て暖炉にくべてしまう。

あっさりと燃え尽きていくティアへの愛の告白の数々を見ながら、リリアは完全なる棒読みで返答。もしかしたらこの人、自分が結婚するときにもなんか邪魔してくるかも。そんな恐ろしい思考がリリアの頭にちらりとかすめた。

「ティアのひやつも、ずっと王宮で働りゃいておれば、結婚にやど

せずとも……！」
「そうでございますねー」

メデイチ侯爵は、泥酔してとうとう呂律も怪しくなってきた。ちなみに本人には自覚がないが、ティアは非常によくモテる。妾腹であり、異大陸の血が混じっているという障害があつてなお、だむしろそこがいいというアホな意見も聞いたことがある。あの大陸特有の艶やかな黒髪は非常に目につきやすいし、目をそらさないティアの黒目は、相手にはっきりと印象を残す。小柄でほっそりした体軀は、華奢で可憐。すっきりしつつも整っている顔立ちには、他にないオリエンタルな魅力がある。

ティアが王宮に行き人目に触れるようになってから、まあ縁談の申し込みが増えるわ増えるわ。いつの間にもやら暖炉の燃料になるだけの量がどっさりたまってしまった。さすがに容姿だけではここまです釣れないだろう。王宮でどんなメイド生活していたのか、多少は興味がある。

(あとでしつかり聞きだしませんと)

そして、自室で腹を抱えて笑うのだ。そんなことを考えながら、リリアはその夜、主が酔いつぶれるまでししおどしのように機械的な動きでグラスに酒を注ぎ続けた。

小話 真・侯爵という責任ある立場にいる祖父について（後書き）

かわいいおじい様は好きですか？

いや、いいんですよ。答えなくていいんですよ。回答を思い浮かべる必要もないんですよ。だって、まあ、わかってるんです。需要がないことぐらい、わかっているんです。しかも、うまくツンデレに書けなかったことぐらい、承知しているんですけど……！

小説の奥深さに敗北感を思いつつも、きつといつかリベンジすることを誓って。 2011・11/25

第五話 自由という誰もが憧れる夢について

どの国でもそういうもののだが、税金の収支を計算すると、必ず0.1〜5%ほどの財源が行方不明になっているのがわかる。わかりやすく式に表すと、本来ならば「年収＝年度支出分＋余剰分」とならなければいけないのだが、なぜだがこの等式が成り立つことはどの国家のどの年度でも決してありえない。

ティアがいま読んでいる新聞などにも堂々と公開されている情報なのだが、意外なくらい騒ぎ立てられることのない事実である。

「ワイロかな」

もしくは、横領か。朝食を食べ終わったティアが新聞を読みながら税金の行方不明分の行先を予想すると、後ろに控えていたりリアはにこりと笑い

「私の意見としては、女性のドレススカートの膨らみかはおかねがいつぱいと」

と彼女一流の言い回しで答える。

ティアはなるほど、と納得してしまう。歴史の影に女あり。実際、不明分は結構な割合で女性に貢がれているはずだ。高級娼婦だったり、サロンに佇む上流貴族の婦女だったり、その行先は様々だ。

「細かく計算したら、どの税金がなくなってるかわかるかな」

「暇むたつぶしにしかありませんよ？」

「うん。言ってみただけ」

ティアとて別に財源の裏を探る気もない。国庫の数パーセントを

やすやすと収めてしまう女性の服の神秘に感心しつつも、ティアは新聞をめくった。

どうでもいいゴシップ記事に埋もれるようにして、興味のひかれるニュースが二つ三つ。斜めに目を走らせて、ふとその中の一つに目を吸い寄せられる。

南土内にある、少し離れた国で、国王を中心にして改革が推し進められているというものだ。

「何か気になるニュースがおありですか？」

「うん。これ」

動きを止めたティアにリリアが問いかける。ティアは、リリアにわかりやすいように紙面を指さして見せた。

「改革、ですか」

「うん。これからが気になる」

これは前々からティアも小耳にはさんでいたが、とうとう新聞に載るほど表面化してきたらしい。あの国ではしばらく愚王が続いていたが、今代の国王は賢王だと聞く。どんな風に国が変わっていくのか、余所事ながら少し楽しみだ。

「我が国に、何か影響はあるでしょうか」

「あの国は国王がきちんと弁えてるから、国外には大した影響はないと思う。ところでリリア。うちの屋敷も抜本的な人事の改革をすべきだと思うけど、どう？」

「いえ、その必要はありません」

どこを何とは明言しないが、何をどうにかしてほしいティアの提案をリリアはゆるぎない笑顔で棄却する。

「適材適所な人事を行っている」と自負しております」
「ふーん」

適材適所、という言葉にティアはおざなりに頷く。その言葉に納得できない要素がいまこの部屋に存在するからだ。

「適材適所という割には、なにかこの部屋に足りないと思わない？」
「はて」

問われたリリアはぐるりと部屋を一瞥する。

この部屋にいるのはティアとリリアの二人だけだ。調度品はいつも通りの配置で、怠ることなく掃除をしている証明か、ほこりなどをためることなく磨かれている。ティアの寝起きで乱れた寝台もベツドメイキングもすんで綺麗に整えてあり、朝食後のお茶の用意まで完璧だ。

リリアはもともと把握しているだろう部屋の様子をわざとらしく確認し、しれっとした笑顔で首を傾げる。

「朝食あかわりですか？」

「違う」

「では紅茶やほりあかわりですか？」

「なんでそんなにおかわりにこだわるの？」

そんな掛け合いをしていると、廊下からばたばたとあわてふためいた足音が聞こえてくる。

それを聞いて、ティアはため息。

「やっと来た」

「そうですね」

同意するリリアの表情をちらりうかがったが、その笑顔は残念ながら変化なかった。

間をおかず、ばんっ、とメイドの所作にあるまじき勢いで扉が開かれる。扉を開けたのは、本来リリアの代わりにティアの傍にいるべきレディースメイド、エレンだ。

「申し訳ありませんっ、寝坊しましたぁ！」

どうしようもない理由でせえはあと息を切らせながら、それでも頭を下げる。その勢いで頭にかぶせていたナプキンキャップが吹っ飛び、ティアを強襲。狙ってやってもうまくいかないドジだが、むざむざ食らうこともない。ティアは真っ白な帽子を空中で指にひっかけて搦み取り、ドジなメイドの顔面にぶつけて返した。

「あうっ」

「おバカ。三十秒あげるから、身なりを整えて」

「は、はいっ」

飛んでいったナプキンキャップはもとより、廊下を全速力で走ったせいも、エプロンドレスもしわくちゃで見苦しい。

「では、私はこれでしつれいします」

適材に適所が現れたので、その代役をこなしていたリリアは一礼して部屋から下がる。

命じられたエレンは、あわてて栗毛の髪をナプキンキャップに収め、ぱたぱたとドレスの裾を整えていた。

そつだ、カフェエに行こう。

ティアがそう思い立ったのは、エレンに『乗せているものを落とさないトレイの持ち方』を教えていた時だった。

エレンがお茶をひっくり返しそうになり、ティアがそれを阻止する。それを繰り返すこと三度ほど。世の中習うより慣れるという言葉があるが、エレンはちつとも慣れる様子がない。トレイを持てば乗せているものはなぜか十六ビートの震えを刻み、お茶を汲ませれば、味や香りがどうこう以前にこぼしそうになる。

こんなメイドに尽くされていても、心臓がハラハラするだけである。これは最初から教え込んだほうが早いかもと見切りをつけ、エレンに基礎をみっちりたたきこんでいたのだ。

一から十までティアの知っている限りのメイド知識を叩き込みながらも、そういえば、王宮にいたころもこんな感じに後輩に教えていたな、と思う。内容はここまで低レベルではなかったし、覚えがこんなにも悪い生徒は一人としていなかったが。

そんな風に昔を懐かしみ、エレンがようやくいれるのに成功した紅茶をすすった時に、ティアはふと思ったのだ。

（味も香りも飛んでる。高いお茶の葉が台無しだ。トレイをしつかり持てるようになったら、ちゃんと温度とタイミングをつかめるように教えな……………な
んでわたし、こんなことしてるの？）

と。

ここはメデイチ侯爵の屋敷であり、ティアはその令嬢だ。子女なのだ。けっこう偉いのだ。尽くされる立場であるのだ。断じて尽くす側でなければ、教育する立場でもないのだ。

だというのに、いまやつてゐることはメイドとさして変わりがない。それは、いまの行動を王宮でのメイド生活と重ねてしまったことから考えても間違いない。

そもそもがおかしいのだ。リリアに会えば遠まわしにからかい倒され、エレンが傍にいれば彼女のドジに心休まる時がない上に教育を施している。ティアがリリアに言い負かされてエレンを指導しているこの状況は、控えめに言ってもわけがわからない。

これはおかしい。

というか、ティアだってたまには心安らかに尽くされたい。

「という訳で、外に行ってくる」

エレンの助けを借りずに手早く着替えたティアは簡潔に告げる。身に着けているのは裾の閉じた白いブラウスに、腰に細いベルトをまいて黒いスカートをはいている。首には、飾りに灰色のケープが巻いてある。

それぞれそこそこ高級なものだが、貴族の令嬢の服装としてはやや素っ気なさすぎる。もともと王宮にいた時に外出用として使っていたティアお気に入りの一着だ。

「え、えっ?」

一方エレンは主人のいきなりの行動についていけない。彼女が目を離れた数十秒で、主人が外出の支度を整えていたのである。とはいえ、もともと置いていくつもりだったので、ティアは混乱するエレンをスルーして廊下に出る。

が

「にがしませなみどうなさいましたか、お嬢様」

「……………」

何故か、笑顔のエレンがそこにいた。

「……暇なの？」

「まさか」

返された言葉に、ティアは恥じ入った。いまのは確かのリリアの言う通り、愚問だった。もしやずっとこの部屋の前に張り付いたのでは、と邪推していたが、そんなわけではない。リリアはこの屋敷で最も忙し人間の一人なのだ。おそらくはティアの行動を読んで、ベストタイミングでここに来たのだろう。

それはそれでアホみたいだとは思うが、なにせよりリアにティアの外出を止める権利はない。このまま強行突破してしまうのが最善手と判断した。

「じゃあ、わたしは外に行ってくる」

「左様ですか。馬車はご利用ですか？」

なにが『じゃあ』で何故外出するのか。ティアの行動を予測して先回りできるほどに優秀なメイドであるリリアは、そんなことはいちいち聞かずに返答する。れっきとした上流階級の家であるこの屋敷には、専用の馬車が存在する。

その質問に、やはり、とティアは思考する。別に、ティアが外出すること自体はどうでもいいらしい。リリアが問題としているのは、いままさにティアが逃れようとしているものなのだ。

「いかない。歩いていく」

「左様ですか。では付き人はご利用ですね？」

「もっといかない。一人で歩いていく」

押し売りをきつぱり断つてとリアの脇を抜けようとする。

だが一步踏み出したところで、につこり笑つてその進路をふさぐ性悪メイドが一人。ティアは強制的に二の足を踏まされる。

「……」

エレンのドジはかわせるし、なんとか矯正も可能なようだが、リアの性根はそうたやすいものではないらしい。ねじまがったその心根は、なかなか人の手に負えるものではないらしい。

ティアは面を上げて、障害物をぎつとにらみつけた。主人からこんな凶悪な視線を頂けば、恐れおののくのが普通の神経をしている使用人というものだが、もちろん普通の神経でないリアがひるむはずもない。ティアの威圧など、どこぞ吹く風。何でしょうかとばかりに、にこりと笑つて首を傾げた。

「ばちり、と両者の間に火花が散った。」

「エレン」

「部屋の中にいて」

「はいっ……え？」

上司と呼ばれ、しかし主人に押しとどめられたエレンはどうすればいいのかわからない。二人の圧力に挟まれてかわいそうなおろおろとろたえるが、そもその原因は彼女のドジなので、これぐらいは当然の報いだらう。

体の半分だけ中途半端に廊下に出してしまったエレンはどっちに味方をすればいいのかわからない。そこに偶然、廊下を掃除中のメイドが通りかかる。

「……っ。……！」

エレンはその同僚に視線で助けを求める。同情を誘うに十分な、必死な仕草である。

しかし救援を求められた彼女は、リアとティアを目撃した途端に、ぽん、と手を打つ。どうやら何か急用を思い出したらしい。無言のままくるりと踵を返して、今しがた掃除をしてきた廊下に戻っていった。

「~~~~~」

裏切り者！つ、と涙目になるが、ティアとリア、その二人の間に板挟みにされたエレンをどうにか助けることができるのは、残念ながらこの屋敷ではメデイチ侯爵その人ぐらいなものだ。

そして当然、侯爵が通りかかるなんて偶然が起こるはずもなかった。

第五話 自由という誰もが憧れる夢について（後書き）

拙作にお付き合いいただいている方、本当にありがとうございます。

しかし、全然話が進みませんね。でも安心してくださいます。そういう仕様なんです！ 作者が！

……というのは冗談（を装った本気）で、あと二、三話したらちよびっと話が進む予定です。話が進んでもティアの婚活が進むとは限りませんけどねっふふ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5251y/>

王族という偉大なる変態に挑むいたいけなメイドの人生について

2011年11月29日01時45分発行